子供の言葉、教師の言葉

私が初任の時、同じ学年のクラスを担任していたM先生は、授業や日記の中の子供の言葉を丹念に記録され、子供たちの成長や自身の指導を振り返っておられました。私は、幸いにも１年間にわたり、その記録を読ませていただきました。いただいた記録は、今も大切に持っています。

放課後などに、M先生が子供の様子を話したり書いたりされる姿は、心底楽しそうでした。「生活を生き生きと書くことによって、ものを見る目や感性が育つ。」これがM先生の持論でしたが、「自分でやってみたことこそ身に付く。」という確固たる方針から、指導はできるだけ控え、体験や自発的な活動を重視して取り組ませておられました。そこから出てくる子供たちの表現のおもしろさや伸びしろの大きさ、自分の成長を綴る素直な言葉、ユニークで力のある言葉に、私は、深い感銘を受けました。それを引き出し育てておられるM先生に、少しでも近づきたいと思いました。

M先生は、ご自身の経験や読んだ本、観た映画のことなどを、子供たちに積極的に発信し自己開示しておられました。傍らで一緒に聞かせていただいたこともありましたが、飾らない言葉、温かい言葉で語りかける一方で、子供の声に耳を傾け、「うん、うん、そうか。」とうなずくまなざしに、子供たちは、うれしそうに話を続けていました。

日々の教育の営みは、子供の言葉、教師の言葉によって紡がれていくことを思うとき、一つの言葉の重みを大切にすることは、私の教育観のベースになっているものです。

「言葉」は、つかう人の感性や考え方、生き方を映し出すものであり、私自身、日々、地道に精進し、豊かな言葉、力のある言葉、相手に伝わる明快な言葉を発信できるよう心掛けています。